「学生による地域社会貢献」につながる大学としての支援の試み

鎌倉　博
（名古屋芸術大学　教育学部　子ども学科）

1　学生時代における社会貢献活動

(1) 大学の位置づけと教育の目的

2006（平成18）年改定教育基本法第七条2で、大学の役割は以下のように定められている。

「大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。

また、2022（令和4）年改定学校教育法では、以下のように定められている。

「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。

2　大学は、その目的を実現するための教育研究を行い、その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。」

文言の違いはあるにせよ、大学は「学術を中心」として教育活動を展開する機関であり、その目的は

① 高い教養、広い知識を身につける
② 専門的能力（知的、道徳的及び応用的能力）を身につける
③ 深く真理を探究して新たな知見を創造する教育研究を行う
④ ①～③を通して、その成果を広く社会に提供することにより社会の発展に寄与する

ことにある、とされている。言葉を換えれば、「教養」「実習」「研究」「社会貢献」が大学教育に必要な4要素と言える。

(2) 大学に求められている期待の変化

中央教育審議会は2012（平成24）年に「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて―生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」と題する答申をまとめた。そこでは、大学生に求められる社会からの期待の変化が分析され、「学士課程教育の質的転換」が必要であるとしている。すなわち、「従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。」（答申「4. 求められる学士課程教育の質的転換」）としている。

この答申にある大学教育への「アクティブ・ラーニング」の導入を巡っては、民主教育研究所が『人間と教育』第91号（2016年9月）で「アクティブ・ラーニングという「呪縛」という特集を組んで、都留文科大学の田中昌弥、京都橘大学の八木英二、和光大学の梅原利夫らが批判論文を掲載している。教育基本法や学校教育法に定められている「学術を中心」として高く、深い教養を身につける場、深く真理を探究して新たな知見を創造する場として大学としての価値がある点で考えれば、それらの批判は理解ができる。

しかし、大学進学率が年々高まり2022（令和4）年4月段階の学校基本調査では大学進学率は56.6%まで上昇してきていること、少子化による大学間の生徒争奪が激化していくと定員割れが続く大学があること、そのことにより不登校経験等様々な課題や困難を抱える生徒も受け入れてきていることが、特に本学部では顕著になってきている。そうした事情を抱える本学部においては、「学術を中心」として高く、深い教養を身につける場、深く真理を探究

して新たな知見を創造する場としての位置づけだけを入学生全員に求めることは大変困難である。

一方で、

① 受け入れ先である職場は、大学で学んでいることが社会活動として活かせ、その体験で培われた力によって即座に社会人として活躍できることを求めている。

② とりわけ教員・保育士志望者には、

1）教育・保育指導知識とともに子どもと関わる対応力の育成が現実的課題であるとともに

2）体験を通して地域連携の積極的な意義を十分に認識させることが必要になってきている。

③ 人手不足解消・後継者としての継承、若い力による活気ある街づくりの願いをもって地域は学生参加を求めている。

本学部生の状況と地域の願いの両者を総合すれば、講義により座学だけではなく、その座学で学んだことを活かす意味でも、本学部での教育活動においては「能動的学修（アクティブ・ラーニング）」が必然的に必要になってきている。

(3) 私の問題意識・実践課題

(2)で見て来たような、学生に求められている力や学生を含む若者への期待を意識しながら、教育学部生として教員・保育士としての素養を高めていく観点から、筆者は以下の問題意識・実践課題をもつようになった。

① 小学校教育で重視してきた「言語的学びと体験的学びとをリンクさせることで深く学べる授業づくり」を本学部においても進める。

② とりわけ子どもたちと関わる機会を学生に提供し、教員・保育士、保護者、大人として必要な子どもと関わる力を高める。

③ 社会貢献することでの楽しさや喜びを学生自身が体験し、地域連携で教育・保育活動を深められる力を高める。

④ 学生の活動・活躍を通して名芸大および教育学部の存在を地域社会に浸透させる。

２．取り組みの軌跡

以上のような問題意識・課題意識を前提に、筆者自身が「子ども育てを中心とした地域支援活動」「地域を題材にした教育づくり支援活動」「資格を社会貢献に活かす支援活動」の 3 つの観点で取り組んできた実践の軌跡をここに紹介する、

(1) 子ども育てを中心とした地域支援活動

① 子ども夏祭りイベント支援活動

筆者は 2015 年に本学に着任した。その当時、私と同じ教育研究団体に加藤聡一准教授が所属していた。その加藤は、学習・研究と実践活動とを統一することで深く学ぶ「生活教育」を標榜する教育づくりを大学教育においても追求しようとしていた。そのため加藤は、北名古屋市福祉部児童課や同総務部市民活動推進課と本学部との連携を組織しようとしていた。そうして、本学部 1 年次必修科目「入門演習」（当時）で、1 年生全員を児童館や保育園等の「夏祭り」に配置し、子どもとの関わりの機会を設けるとともに、学生達の社会貢献活動を組織していた。この活動に実際に学生とともに参加した筆者は、日常の授業では見られない学生達の生き生きとした姿や、その学生達の関わりを喜ぶ幼児・学童、保育者や児童館職員、保護者を目の当たりにして、専門的知識を教授し学べるようにしていくとともに、保育・教育系大学であるからこそ一層子どもに関わる地域活動を体験する中で実践的に学ぶことの大切さを実感させられた。

加藤はその後他大学に移籍したものの、加藤が築いた北名古屋市福祉部児童課や同総務部市民活動推進課との関係は継続していくべきであると筆者は考えた。そこで「夏祭り」に関しては引き続き北名古屋市福祉部児童課と連携し、依頼を受けては支援活動が継続できるようにしてきた。コロナ禍の 2020・2021 年度は中断せざるを得なかったが、

2022 年度は 1 年次必修科目「子ども学総論」の授業活動として、担当教員 7 人のグループごとに場所を指定して支援活動に参加した。また、同年度には、1 年生だけでは依頼に応えきれなかったため、学部全体に自主ボランティア参加を呼び掛けた。すると 3 年生 3 人が応え、別の 1 か所で夏祭り支援した。

北名古屋市内にも本学部卒業生が、保育士や児童館職員として勤めている。筆者の担当するグループが支援に行った保育園と児童館では、それぞれ卒業生の保育士と児童館職員を紹介することもできた。身近な地域で保育士・児童館職員として活躍する卒業生の活躍に、直接触れられる機会ともなった。

また、この支援活動は地域における子ども支援の楽しさを知る機会となり、その後学童クラブや児童館に関心をもってアルバイト等で学生が参加するようになっているケースも見られる。

さらに今年度は、地域・社会連携部を通じて本学部に、鹿田自治会（北名古屋市鹿田地区町会の連合体）夏祭りの子どもお愉しみ活動への支援要請があった。そこで、学部全体に呼び掛けてみた。すると、4 年生 2 人、3 年生 4 人、1 年生 1 人を組織することができ、参加要請に応えられることになった。学生達は分担して、自分達で企画した「ヒーローを探せ」の準備をしていた。しかしながら、コロナ禍の感染状況を踏まえて、開催 1 週間前に中止となってしまった。

② 障害者共同作業所イベントの支援活動

筆者は北名古屋市の住民でもある。そのため、北名古屋市内の様々な方々との出会いがある。そこで、その条件を活かして、本学部のネットワークが広がるように動くことを心掛けてきた。そうした中の 2015 年、北名古屋市内の障害者共同作業所であるあかつき共同作業所の存在を知り、同作業所が毎年秋に行っている支援イベント「あかつき祭り」にボランティア参加した。そうして、「ぜひ学生さんで子どもコーナーをやってもらえないか」との相談を受けて、2016 年度から専門演習「子どもの生活と教育ゼミナール」生を主体にして「わくわく子どもランド」を担当するようになった。

「わくわく子どもランド」には、支援イベントに参加しに来た親子とともに、作業所の「仲間」（同作業所で働く障害者のこと）と職員、その保護者も来られる。

印象的だったのは、もう片付けようかという頃に来られた、30 代と推察される「仲間」と 50 代と推察されるその母親の姿であった。会話と機敏な動作が困難と推察されたその「仲間」は、磁石で魚を釣り上げるゲームに熱中し、15 分ほどかけて約 30 匹の「海の生き物」を次々と釣り上げた。すると、真剣に釣りをしていた時の顔とは対照的に、満面の笑みで最後の 1 匹を釣り上げた。その瞬間に母親が「すごい！」と我が子を讃えるとともに、「ありがとう、ありがとう、この子がこんなにうれしそうな顔をするのを見たのは何年ぶりでしょう」と言って涙するのであった。思わずその場にいた学生も笑顔を返しながらも、その言葉に感激して涙していた。

「わくわく子どもランド」は、2016 年度以降も筆者が担当する 3 年次専門演習「子どもの生活と教育ゼミナール」における授業の中に位置づけ、コロナ禍で開催中止だった 2020・2021 年度を除き毎年参加している。そのために、演習課題として手作りゲームも毎年増やしてきた。その手作りゲームは、同イベントや芸大祭「わくわくかまくランド」等で使用している。

このイベントでもう 1 つ記しておきたいのは、障害を持つ「仲間」達の積極的な姿に触れられることとともに、その「仲間」達の支援や介護に駆け付けてきている本学芸術学部（伊藤孝子准教授所属の学生と聞いている）、及び日本福祉大学・中部大学のボランティアサークルの学生達と出会えることである。イベントの中で短い時間ながら、紹介し合っている。これらの学生は、授業での課題参加ではなく、学生自身の自主サークルとして参加しているのである。自主的に「仲間」を支援しているこれらの学生に触れることで、課題参加から自主参加する学

生への成長を期待している。

③ 芸大祭での子どもの遊び支援活動

2015 年に着任して初めて「芸大祭」を体験した。ステージでの演奏、ステージや体育館等でのサークル発表、屋外での模擬店、実行委員による遊びのコーナーで、中庭を中心に盛り上がっていた。2016 年度筆者が担当する基礎演習で模擬店を開くことにした。辛うじて完売し、その売上金でケーキパーティができたのがせめてもの喜びであった。

しかし翌年度からは、筆者が担当する異学年ゼミ生をすべて組織して、幼児・学童の遊び支援のための手作りゲームコーナーに取り組むことにした。当時の学生達はその頃附属クリエ幼稚園長だった筆者を呼び水にしようと考え、コーナーの名称にこだわって「わくわくかまくランド」と名付けた。以来、学生達の手作りのゲーム、筆者が一定得意とするコマ・ベーゴマ・けん玉で遊べるコーナー、後述する「切り紙」作品の展示、附属クリエ幼稚園の劇の会 DVD が視聴できるコーナーも設けて、大学祭中止となる前年の 2019 年度まで毎年取り組んできた。

その参加者は、附属クリエ幼稚園児とその家族の他、周辺地域の幼児・学童とその保護者、地域の障害者福祉施設を利用する障害者とその介助職員がほとんどである。コマ・ベーゴマ、けん玉コーナーでは、子どもの付き添いで来られた保護者も体験してみたくなり、「その日初めて回せた」「玉が載った！」と喜んだり、親子対決したりするようなほほえましい姿も見られた。また、その名前は定着し、附属クリエ幼稚園出身の学童とその家族が卒園後も、また障害者福祉施設の方々も毎年のように来てくれている。

本ゼミナールの子どもの遊び支援活動は、他のゼミナールにも広がるとともに、2018 年度からは 1 年次必修科目「子ども学総論」の授業活動の一環としてのイベント「子どもランド」として位置づくようになった。

④ 幼稚園・こども園支援活動

筆者は、2016 年度に人間発達学部（当時）教員と兼務で附属クリエ幼稚園長に就くことになった。筆者がモットーの 1 つとしたことは、「大学と幼稚園の関わりを深めることで、学生にとっては幼児との関わりを通して子ども理解・保育理解を深めること、園児にとっては保育者とともに学生が関わることで一層幼稚園生活が楽しくなること」であった。まさに。幼児と大学生が共育てする関係が築かれることであった。

そこで、第 1 に保育ボランティア（自主保育体験）の学生を募るようにしてきた。限られた幼稚園予算では、学生をアルバイト採用する余裕がなかった。そこで、無償にはなってしまうが、幼児との関わりを通して子ども理解・保育理解を深めることになること、園児・保育者・保護者から喜ばれ保育士・幼稚園教諭になることへの思いを高めていくことができることを伝えて、参加の機会を提供してきた。コロナ禍で受入れが困難だった時期もあったが、任期を終えて幼稚園長を降りた後もこの呼び掛けは続けている。実際、この活動に参加していた学生の多くが、その後保育士や幼稚園教諭に就いている。

第 2 に「切り紙模様」の展示を行うようにしてきた。2015 年に本学に着任して以来、担当科目「教科技能生活」で切り紙工作を行っていた。小学校低学年科目である生活には 9 つの題材が指定されている。その中の 1 つに「遊びと遊びで使う物」が位置づいているのである。そこで、教室を飾る工作活動の 1 つとして「切り紙模様」作りを実習活動として位置付けた。カラー折り紙を等分に折って、思い思いに迷路状にハサミを入れて開くと、鮮やかな対称図形の「切り紙模様」となる。

2016 年度に附属幼稚園長に着任してしばらく、玄関ホールの白い壁面がとても気になった。ここを作品展示して質の高い作品づくりへの園児達の意欲を喚起できないものかと考えた。そこで、この学生達の「切り紙模様」を展示することにした。すると園児がさっそく関心を示し、担任に作り方を尋ね

たという。そうして「好きな遊びの時間」の活動として、園児の中でも「切り紙模様」作りが始まった。

それが1つの流行となったことから、クリエ幼稚園ではカリキュラムの見直しの際に「切り紙模様」作りを年長クラスの制作あそびカリキュラムに位置づけることになった。以来、コロナ禍でのオンライン授業で取り組めなかった2020年度を除き毎年作品展示している。そうして、2021 年度からは社会福祉法人 NUA 幼保連携型認定こども園森のくまっこ及び学校法人栄和学園栄和幼稚園にも展示するようにしてきた。これらの園でも、学生達の作品を通して「切り紙模様」作りが保育活動として広がってきている。

第 3 に附属クリエ園長在任中の 2017 から 2019 年度には、保育士・教員に就く学生に限らず、全ての人間発達学部（当時）生の「他者と繋がれる」力の育成も念頭に、1年次必修科目「入門演習」（当時）では「クリエであそぼ」、2年次必修科目「基礎演習」では「クリエの園外保育活動」に学部生全員が体験できる機会も設けてきた。コロナ禍で2020・2021年度は中断せざるを得なかったが、2022年度「子ども学演習」の中で再び「クリエであそぼ」の機会を設けることができた。日頃の講義の中では居眠りするような学生達が、園児達の前では立派な「お兄さん・お姉さん」となり、道路を横断する際などは園児に手を挙げて横断することを教えていた。

⑤ 子ども食堂支援活動

筆者が担当する専門演習「子どもの生活とゼミナール」は、子ども又は子どもの生活に関わる実態調査を通して教育・保育・子育て課題を考え、子どもの学習を含む生活の改善につながる実践活動を展開していくことを重視している。その中の2018年ゼミ生は、「子ども食堂」を研究テーマに設定した。そこで、北名古屋市内で「子ども食堂」を展開している「陽だまりハウス」と「平田寺」の2か所を活動場所として設定し、各1日支援活動しながら「子ども食堂」の活動、そこに集う子どもたちについて観察した。支援活動に参加するまでは、集うのは貧困家庭の子どもたちと捉えていたが、実際には関わりを求める子どもたちや、貧困家庭の親子が利用している実態に触れることになった。

その後、本学地域・社会連携部に「子ども食堂」への学生支援要請が届くようになった。同部から地域交流センター員でもある筆者に相談があると、筆者は即座に全学部生に呼び掛けるようにしてきた。すると、2名の4年生が応じ、特に人手を求めていた子ども食堂「ちいさん・こっくさん」を紹介し、そこで支援活動を行うようになった。そのやりがいを学友に伝えるうちに、その後さらに新たな1人も加わった。

⑥ 男女共同子育て支援活動

北名古屋市市民活動推進課から、男女共同参画事業イベント「とらいあんぐる」のホール企画の時間帯に託児を担当してもらえないかと、筆者に相談があった。そこで1年生に呼び掛けたところ5人が応じた。ところが、実際に託児を申し込んだのは 1 家庭1人のみであった。特別に依頼した保育者と筆者を合わせて7人で幼児1人を保育する結果となった。

そこで、2021年度からは「託児」にこだわらず、「わくわく子どもランド」としての学生参加を提案した。呼び掛けると4人の1年生が応じた。すると、筆者が担当する「子どもの生活と教育ゼミナール」生が作り溜めたゲームが人気を呼んで、大賑わいとなった。ある母親は「こんなに親子で遊びを楽しめたのは久しぶり」との感想を寄せてくれた。2022年度も4人の1年生が参加した。

⑦ 小学生の職業体験支援活動

北名古屋市市民活動推進課に勤めていた 1 人が有志を集めて、「小学生にお仕事体験できる機会をつくろう」と、2018年度に「きっずタウン in 北なごや」が開催された。市内の企業、自営業、官公庁職場、NPO団体等が賛同して出店した。様々な職業体験が楽しめる機会として多くの小学生が集まっ

た。2019 年度にそのイベントを知り、筆者もボランティア・スタッフとして参加した。その際に撮影記録を託されたので、会場内の職業体験の様子をつぶさに観察しながら任務を果たすことができた。

2020 度年の「きっずタウン」には、北名古屋市内の学童クラブ・児童館でアルバイトする学生達が参加していた。そこで、コロナ禍で開催できなかった 2021 年度をはさんで、2022 年度には広く学生に支援参加を呼び掛けてみた。しかし、生憎クリスマス当日の開催にならざるを得ず、1 人の応募にとどまった。その 1 人の 1 年生は、市内の園芸店のフラワーアレンジメント作成補助を担った。その学生にとってもフラワーアレンジメントは初体験だったそうであるが、見事にコツを捉えて「お仕事体験」に来た小学生を店長ともども指導した。その店長からは「ぜひ来年も手伝って」と頼まれていた。学生にとって、小学生の職業体験を補助するだけではなく、学生自身が様々な職業を体験できる機会として、次年度以降もぜひ学生を組織してみたい。

(2) 地域を題材にした教育づくり支援活動

以上は、支援活動を通して地域貢献することでの喜びと楽しさを学生時代に実感してほしいとの願いから、意識的に取り組んできた活動である。しかし、これらの支援活動は筆者の紹介によって学生が取り組んできた活動である。積極的貢献活動に参加している点では学生の主体性が発揮されているとも言えなくもないが、筆者が紹介しなければこうした活動参加はなかったかも知れない。その点では、十分な自主活動とは言えない。

では、どのようにすれば、より学生主体の地域社会貢献活動になっていくのであろうか。その答えは、「地域」を深く認識することにあると筆者は考える。物（モノ）にしても、人（ヒト）にしても、事象（コト）においても、「地域」には無限の魅力が潜んでいる。その魅力に気づくことで、その魅力を発揮できるように受け継ぎ、発信しようとする意欲が生じる。また「地域」は、社会が取り巻く様々な影響（宅地化による自然喪失、不況によるシャッター商店街、少子高齢化による過疎化等）を、肌身で感じ取れる場でもある。そこから地域課題を見つけ、新たな魅力づくりに自身の力を発揮できるような地域社会の主体者になってほしいという願いもある。その意味では、いかに学生に「地域」への関心をもたせられるのか、ここが大学教育に託されているのではないかと筆者は考える。

① 町の緑化につながる栽培活動

2015 年度に本学に着任した筆者は、自然離れで体験が不足していると言われている現代の大学生に、「消費するだけでなく生産する主体」としての生き方とともに、「土に触れることに喜びを感じられる」学生であってほしいとの願いから、「教科技能生活」（小学校の生活科教育）で栽培活動を開始しようと考えた。

ところが、当時思わぬ壁に阻まれた。プランターを買い込んで栽培活動できるよう準備をしていたら、「誰に許可を取ったのか？」と質問された。学校教育ならば何の抵抗もなく栽培活動できるだろうが、「芸術大学に栽培活動はなじまない」と捉えられたのであろう。企画案を作成して学部教授会で口頭提案したり、全学の運営会議に文書提案したりして、約 1 か月を要して栽培活動が可能になった。

その珍しさもあったのだろう。業務上の関わり以外で関係をつくることがあまりないように思われる、学生食堂の調理員、大学内を巡回する警備員、校内美化を業務にしている清掃員の方と、栽培活動及びその収穫物を通して懇意になった。「栽培活動で人がつながる」ことを確信するようになった。

その「人がつながる」ことで思わぬ社会貢献になったのが、学生達との栽培活動を北名古屋市環境課の「緑のカーテン事業」に位置付けたことだった。2016 年にクリエ幼稚園長に就いた際、市環境課の職員がクリエ幼稚園に「緑のカーテン事業」に参加するように勧めに来た。「保育内容環境」にも位置づいている栽培活動を、園の保育活動に位置づける

ことは意味のあることである。そう考えて賛同するとともに、大学の授業で栽培活動をしていることを話すと、プランターや腐葉土、「緑のカーテン」用ネット、それに種や苗も提供できるという話であった。そこで、栽培できる条件も踏まえて、大学で本格的に取り組むようにした。ところが、「緑のカーテン」が張れそうな場所は、12 号館前と 8 号館裏手しか見通せなかった。初年度 2 か所で取り組んだが、12 号館前は生育が悪く、往来が多い割には見栄えよくは育たず断念した。しかし、北側で決して条件は良くないはずの 8 号館裏手の学生食堂外では、相応に育った、そこで、2017 年度からは学生食堂の大きなガラス窓を覆うように栽培するようにした。

受講生の全てが意欲的に栽培するには心もとないが、それでも関心をもって水やりする学生もいて、「緑のカーテン」と呼べるほどになった。2019 年度にはその甲斐あって、北名古屋市「緑のカーテン・コンクール」団体の部最優秀賞、翌 2020 年度は同優秀賞を受賞した。

その 2020 年度には、地域緑化に積極的に大学で取り組んでいる事例として、愛知県環境局発行の「あいち森と緑づくり　環境活動・学習推進事業 2020 年度事例集」に掲載された。

「緑のカーテン事業」に本学の栽培活動を位置付けたことは、学生自身の栽培活動への関心につなげるだけでなく、学内全体にも広く「自然の恵みとしての緑」のありがたさを伝えていくことになるとともに、地域での緑化意識を高めることにつながっていった。

②「町の魅力」を発見する活動

「教科技能生活」では、2015 年着任早々「大学周辺の名所探索活動」も位置付けた。受講生を 2 人から学生数の多い時代には6人程度までを1グループとして、いつもの通学路とは別の大学周辺の東西南北を 90 分かけて探索し、「大学周辺の名所」と思われる 2 か所で観察・取材活動などを行って、レポートして大学に戻る展開である。飲食できる店であれば、購入して食事レポートすることもよしとした。

学生達の中で特に下宿生にとっては、馴染みのなかった大学周辺地域に、今まで知らなった店を知ることになり、この活動はとても助かるという声があった。町の人も、通学路ではない道にあるお店に学生が来て、興味津々で観察・取材していくことで、「学生さんが来てくれるのは久しぶり。またぜひ来てほしい」と言われたという報告もあった。中には、食事レポートしようと「お店の名物」を購入し、「おいしい」という声を届ける学生達もいる。少額ではあろうが地域にお金を還元する意味でも、1 つの地域社会貢献活動になるであろうと捉えている。

コロナ禍でオンライン授業にならざるを得なかった 2020 年度を除いて毎年実施し、今年度で 7 年行っている。そろそろ新たな特集先は尽きるかと思うが、それでも毎年新たな「名所」が紹介されてくる。そして、7 年経つと町の移り変わる様子も見えてくる。かつては学生で繁盛していたという、とんかつ屋「とんとんハウス」は 2019 年に店を閉じ、今は街灯にかかった商店街としての小さい看板が残っているだけである。

「教科教育生活」では、生活科の授業で地域施設の利用も進めたく、学生達を毎年引き連れて北名古屋市昭和日常博物館にも出かける。「平成生まれ」の学生達にとっては、現代の物品につながる昭和初期のモノに大いなる関心を寄せる姿が見られる。こうして「古き物」を粗末なモノとしてではなく、現代につながる貴重なモノとして次代に継承していける主体になってほしいと願っている。

③「私の住む町のじまん PR 新聞」作り

2020 年度から「総合的な学習の時間の指導法」が開講された。2020 年度は小学校教員免許状取得希望者である人間発達学部（当時）生のみの受講であったが、2021 年度からは中学校及び高等学校教員免許状取得希望者である東西キャンパスの芸術

学部生も中学校及び高等学校の内容として受講している。

総合的な学習（高等学校では探究）の時間ではいくつかの題材が例示されている。その中に「地域や学校の特色に応じた課題」があり、全国の学校で学校区の地域を題材にした探究活動を行っている。そのことを根拠に、学生自身が改めて地元地域を取材・探究し、それらから得た情報でA4版2枚の「新聞」にまとめ、授業内でプレゼンテーションする学習活動を組み入れている。そのことで、生徒への学習指導の展開を掴ませるとともに、教員希望者に地域を題材にした教材開発力を獲得させようと考えたからである。

学生からは、取材への戸惑いの姿が毎年見られるが、「たくさん話してくれてありがたかった」「取材に来てくれたことをとても喜んで下さってお土産もいただいた」「（美術領域の学生が取材先の喫茶店で）話していくうちにここで個展をしないかと言われた」などの感想が届いている。学生が取材先に関心を寄せたことそのものが、取材先を喜ばせているのである。

そうした情報を新聞にまとめ、パワーポイント上に乗せて、1人ひとりが授業時に約3分ずつでプレゼンテーションする。そうすると、受講生が住む各地に様々な魅力があることが分かり好評であったことから、開講初年度から継続している。

本年度は、広報部からの勧めもあって、東キャンパス・アートギャラリーにて「私の住む町じまんPR 新聞展」を開催し、「北名古屋タイムズ」でも紹介された。来場者の中には、居住地や親しみのある町の「じまんのもの」を見て会話を弾ませる姿も見られた。「新聞展」は今後、3年に1回の予定で開催しようと考えている。

④「大学周辺地域の動植物」を調査しての教材づくり

2015年着任時から担当している「保育内容環境」では、動植物を積極的に保育の題材として取り上げるよう幼稚園教育指針・保育所保育指針等に示されている。ところが、実際には十分扱えていない現状がある。その要因の1つは園のある地域がそもそも自然環境に恵まれていないからであるが、もう1つに保育者自身がアウトドア活動を含む自然遊びを忌避している傾向にあるからだ。実際毎年、「教育・保育者目指す現代の学生の動物に関する意識調査」を授業時に行っているが、過去8年間同様の傾向が見られるのは、幼少期には動物に触れようと積極的であった学生が7割以上いたのに、大学生である現在では3割程度に落ち込むのである（名古屋芸術大学教職センター紀要第4号 pp. 227-245 鎌倉博「教育・保育者目指す現代の学生の動物に関する意識調査」）。

その要因は、学生自身が答えているが「動物に触れる機会が減ったから」「感覚が変わった」等にある。教育・保育者が積極的に動物を含む自然に触れることでの積極的な学習・保育活動を展開するためには、学生時代からその苦手意識を払拭する必要がある。そう考えて、水生生物やハムスター、ヤモリ等を筆者の研究室で飼育し、訪れた学生達がいつでも触れられるようにすること、そして「保育内容環境」の授業時に教室に運び、受講生全員が触れ合える（触らなくても身近でよく見るだけでも良い）機会を設けることにしてきた。植物同様に、これらの動物を通して学生や清掃員等と触れ合えるのも楽しい。こうして、動物と大学内でも触れられる環境を整えるとともに、「保育内容環境」の受講生には授業時に触れ合える機会を現在も継続している。

2021年度、専門演習「子どもの生活と教育ゼミナール」に、理科教育を専門とする東條文治准教授が新たに位置づくことになった。そこで、東條准教授の専門性を活かしてより本ゼミナールを発展させようと考えた。学生達と話し合い、「地域の動植物」を研究テーマとすることにした。春夏秋の3回大学周辺を散策しながら、どのような動植物が目撃できたかを記録し、特に写真撮影してデータを溜めた。後期にそれをどう活かそうかと話し合い考えるうちに、1つは図鑑、もう1つはカルタにしよう

ということになった。学生達が目撃した動植物一覧を4人の学生で分担して詳しくその特徴を調べ、小学生に分かる言葉と内容で文章にまとめた。また、さらにその特徴を踏まえて五七五調の言葉にしてカルタを作成した。写真は学生撮影のものを原則とし、不足については東條准教授に提供いただいたり、インターネット上の写真を出典明記して活用したりした。こうして、冊子とCDで「北名古屋市熊之庄地域の動植物図鑑」を、さらに写真カードと読み札とで「同カルタ」に仕上げた。この2つは、大学近隣の北名古屋市立師勝北小学校 5 年生に贈呈するとともに、「カルタとり大会」をして喜ばれた。

2022 年度も、最後に「図鑑」と「カルタ」にまとめることを目的に、同テーマで「北名古屋熊之庄地域の動植物調査」を行った。今年度、国語教育を専門とする西田拓郎教授が本学部に着任された。西田教授は特に俳句作りを得意とされていることに影響を受けて、春夏秋の3回の調査活動では必ず事後に俳句作りしてみた。そのことが、2021 年度にない活動を生んだ。それは「自然環境啓蒙ソング」の作成である。「図鑑」や「カルタ」の作成の目途がついた段階で、過去に作り溜めた俳句を活かして歌詞を作ってみることを提起した。各自が作ってきた歌詞を共有すると、それぞれに良さがあり、そこから合作しようとの話になった。みなの活発な議論で瞬く間に春夏秋冬の4番構成で歌詞ができた。その後1人のゼミ生が作曲をし、歌ってみながら歌詞や曲を若干変更して、ついに完成した。題名は「季節の冒険 ～Looking for my best season」となった。「図鑑」「カルタ」は小学生対象の教材になるが、歌は保育現場でも十分活用できる。2022 年度も師勝北小学校にて「カルタとり大会」を行うとともに、「季節の冒険」も実際に小学生と歌ってみることができた。

このように、授業活動の中で大学周辺地域を意図的に取り上げることで、動植物を含む自然環境や、地域に存在するモノ・ヒト・コトに着目して課題解決も含めて魅力発信していく体験を積み上げる。そのことを通して、地域にある自然・モノ・ヒト・コトを活用した教育・保育づくりをしていけるように学生の力量を徐々に高めてきた。ぜひ地域を教育・保育に活用できる、そのために地域に根づき関係をつくっていける教員・保育士になっていってほしいと願っている。地域を大事にする教員・保育士になっていくことそのものが、大切な地域社会貢献活動なのであると考える。

(3) 資格を地域社会貢献に活かす

2020 年度から認定絵本士資格を取得できる「子どもと絵本1・2」が開講された。4日間で15コマ、それを前期後期で展開する中で、聴講するだけでなく内容ある課題も提出しなくてはならない。それでも開講時から30から40名ほどが毎年受講している。

そこで、その資格取得を卒業後に活かすだけではなく、在学中に活かすことでより卒業後の活動に活かせるようにしようと考えた。2020 年度修了時に「読み聞かせ隊」の募集をした。すると、当時 2 年生だった3人が申し出るとともに、「授業をとってなかった人も加えてもよいか」ということで計5名で「読み聞かせ隊」第1号が結成された。名付けて「みつば」である。

絵本の読み聞かせに、音楽をつけた手遊び、手作りのパネルシアターなども準備して、オープンキャンパス等で演出に磨きをかけて、学外でも発揮できる機会を窺っていた。すると、蔦屋書店名古屋港店から「クリスマスイベント」の依頼がきたと、地域・社会連携部から紹介があった。喜んで参加した。5人の生き生きとした活躍は好評を得て、その後再び同蔦屋書店、さらにはJR高島屋イベントからも依頼があって、会場を盛り上げた。

現在、3年生ではあるが2人が新たに申し出ており、「読み聞かせ隊」第2号が結成されようとしている。大学で学んだことを、在学中にも地域社会貢献に活かせる場を可能な限り提供したい。

３．今後の課題

以上、筆者が意識的に取り組んできた、「学生の地域社会貢献」につながる支援活動を紹介してきた。8 年間でその成果は着実に積み上げてきた手応えはある。しかし、その現在であるからこそ、次なる課題も見えてきている。

① 大学としてのネットワークをさらに広げ、協力関係の構築を進める

「芸術大学」ゆえに本学部の存在がまだまだ地域に浸透しているとは言い難い。その存在が浸透していけば、一層依頼の機会＝学生の活躍の場面が増えるであろう。そのためには、本学部の存在を広く伝え、新たな関係をつくっていく必要が私ども教員に課せられていると考える。

② 学生が参加したくなる社会貢献活動を紹介したり一緒に企画したりする

学生に参加を勧める以上は、依頼があれば何でも応えることもできない。稀に学生から聞く声として、活動に参加することでかえっていやな印象を与えてしまったということがあった。地域の中には学生を単なるボランティアに見て酷使させることもあるからだ。学生達が参加してよかったと思えるような条件を事前によく確認して参加を勧める必要がある。

③ 学生が自主的に社会貢献活動している芸術学部や他大学等と出会い、触発される機会をつくる

「あかつき祭り」や「きっずタウン in 北なごや」では、各地で自主支援活動している他大学生等の出会いがある。その学生達は、単位取得を目的にしているわけでもないし、必ずしも報酬があるわけでもない。それでも「人を助ける」ことに生きがいをもって、自主的に参加しているのである。こうした学生達と出会うことは「進んで社会貢献しよう」という、学生の社会貢献活動への主体性を一層高めていくことにつながると考える。

④ 社会貢献を目的とした学生の自主サークルを組織し支援する

筆者は大学生時代の 4 年間、「児童文化研究会」に所属し、大学のある地域の子ども会支援活動に参加していた。そこでは、毎週土曜日に集う子どもたちに様々なレクレーション活動を紹介し楽しく過ごせるようにするともに、夏休みには 2 泊 3 日のキャンプ生活活動支援もした。そのことで現在の自分の教育・保育力は数段高まったと振り返って思う。そこには大学教員は一切関わっていない。あくまでも学生の自主活動であった。本学にも短期大学時代に「児童文化研究会」があったと聞いている。ぜひ、子ども支援等で社会貢献することを目的とした学生の自主サークルが再開されることを願う。そのためには、今しばらく継続して地域貢献活動の喜びや楽しさが味わえる機会を提供していきたい。

⑤ 地域・社会と連携して教育・保育を充実させられる力を育成する

子どもたちとともに、常に地域・社会にもアンテナを張り、その良さを発見しながら連携を築き、それを教育・保育に活かしていけるマネジメント力を、学生時代に磨いていけるようにしていきたい。